校長室だより～燦燦～ №６０３

命の重さ

2022.8.12

７月２０日（水）が第１学期終業式の日だった。翌日より夏休みに入った。２０日と２１日の２日間をかけて、あることについて考えてみた。それは、なぜ夏休みになるとホッとできるのかということについてである。今までは、そんなことは当たり前だろうと思っていた。特段そのことについて深く考えることもしなかった。

ところが、今回はじっくりと深く考えるようになった。学期中でも、土曜日に校長室にいると、普段よりは気が楽である。だが、ホッとできるというレベルではない。２０日の午前中で生徒が下校した。午後になり、急に力が抜けてきた。これが、無事に１学期を終了したということかと自己認識した。

いろいろと思いを巡らせたが、命の重さという結論に至った。普段は、生徒と教職員が一つの建物の中で生活している。ここに、登下校や通勤も加わる。この状態を事故なく何事もなく継続していくためには、それ相応のエネルギーが必要となる。多くの人たちが動くことで維持されることになる。毎日、多くの人たちの命を預かっているのである。命ほど重いものはない。その重さが、責任感や使命感、緊張感をもたらすことになる。気が休まることはない。

今回は、新型コロナウイルス感染症の拡大もあった。週末に対応することが多かった。この問題も命と直結している。今年度に限らず、この状態が続いているが、第〇波の度に状況が変わり、対応も変わる。正しく素早く動く必要がある。

夏休みになったからといって、多くの人たちの命を預かっている状態に変わりはない。いつ何時何が起こるかわからない。少しはホッとしていても気が張っている状態は維持されている。

普段との大きな違いには、授業があるかないかという点もある。毎日計画された授業が実施されることは、当たり前のことに思える。しかし、これとて簡単なことではない。休校や分散登校を経験し、何事もなく授業を展開することの難しさに気づかされた。夏休みには、この授業がないということも大きい。土曜日になると、多少は気が楽になるのは授業がないためなのであろう。

学校経営で一番大切なことは、命を守ることだという話をよく聞く。その意味が、以前よりもひしひしと重くのしかかってきている。夏休みもお盆が過ぎると、気分的には終了である。お盆明けからは、２学期に向けてスイッチが入る。チャンネルを切り替えなければならない。

学校が始まるということは、非常時の体制が続くということである。大きな事故がないから平常時なのではなく、非常時の体制をとっているから大きな事故につながらないのである。重い重い命を預かる場所、それが学校である。